

■ 書 評



職場結合性うつ病

加藤 敏 著
金原出版 2013 年 4 月
213 頁, 定価 2,940 円

博多で開催された本年の日本精神神経学会は、各会場で廊下に立ち見があふれ出るほど盛況であった。国内外の参加者数は過去最高とのことである。本書の著者であり、下野の精神病理学徒のゴッドファーザー的な存在でもある加藤敏氏の教育講演が行われた会場も、若手からベテランまで多数の聴衆で埋め尽くされていた。

氏の魅力は、何と云っても、厚みのある論考の中からの射たキータームを、すつとひねり出してくるところにある。今日的なうつ病の臨床類型の 1 つに並ぶ「職場結合性うつ病」という病名も、そうした天才的な閃きから創出されたものといえるだろう。

過重労働、労働時間の延長、残業の増加に伴い、休むゆとりや睡眠時間が極端に減少し、心身に疲労が蓄積してくる。加えて、日常の業務がこなせなくなり、ミスが増えることから、自己不全感、挫折感を体験するようになる。——今の時代ほど、労働者に過酷な生活を強いている時代はないだろう。グローバル化が押し寄せた職場におけるメンタルヘルスは、働く人とその家族、ひいてはわれわれ精神科医にとって、喫緊の課題である。

さて、「職場結合性気分障害」の概念について、本書の要である第一章と第四章を中心にポイントをまとめてみよう。

- ・発病の主たる誘因は、過重労働（たとえば、時間外労働が月 100 時間を超える）である
- ・ごく普通のパーソナリティの人が疲労感、睡眠障害からなる適応障害を呈しはじめる（この時期までは、患者の自律性が保たれ、「神経症段階」と定義される）

- ・不安焦燥優位で広義の混合状態を呈しやすく、その極期において自殺のリスクが高まる
- ・しばしばパニック障害などの不安障害の診断基準を満たす——ここで著者は、うつ病を見逃さないようにと警鐘を鳴らしている
- ・ついには心身の限界を超え、脳の生物学的変化をもつ本質的なリズム失調に陥り、内因性うつ病を発症する（この時期に至ると患者の自由は失われており、「精神病段階」と定義される）

この主題は、他の章においてさまざまに変奏され、幅広い知見とともに縦横に論じられる。

第二章では、高い仕事課題をこなす「適応性軽躁状態」から発病に至る「職場結合性双極性障害」の病態について、人格構造と生命力動の 2 つの視座から精神病理学的な検討がなされている。

本書の中盤から後半で、19 世紀の内科医ジョンソン、ベアードの臨床記述を生地として、20 世紀を代表する精神科医のクレペリン、フロイト、テレンバッハ、ヤンツァーリクらの理論が練り込まれ、神経衰弱（neurasthenia）から病態変化を起こして進展する内因性うつ病の病態が考察される。それと同時に、そうした病態を生み出す基盤となる現代社会の病理が明らかにされる。

わが国の劣悪な労働環境について、本書では、「大医」である政治家、官僚に解決をゆだねる論調が貫かれているが、著者は「小医」である精神科医として、目の前の患者の治療を放棄しているわけでない。むしろ、きめ細やかで、ふところ深く包み込むような精神療法を行いながら、気分障害の寛解を目指しているのである。

そして最終章で、ポストモダン時代の精神科医は「喪の作業」を手助けする役割を引き受けなければならないと唱えられる。本書を通読し、著者の患者愛、ひいては人間愛に満ちあふれた治療観を味わった者は、日々の臨床現場に立ち向かうためのエネルギーを得るに違いない。

臨床的なエッセンスがふんだんに盛り込まれた本書は、職場結合性うつ病ないし双極性障害の患者を診療する医師やコメディカルスタッフにとって、必読必携のテキストとなるだろう。

(田中伸一郎)